

本学の制作と研究の成果を世に問うための紀要が、今年も発行される時期になりました。長期間にわたっての努力が結晶する紀要の原稿を拝見するのは、私にとってたいへん楽しみです。多くの人びとに好評を得た作品集があり、研究の成果を集大成した論文、活動の様子を紹介した研究ノート、また調査の報告などが掲載されます。どれも力作揃いです。本学の学生や教員の幅広く力強い活動を、紀要を通してご覧いただきたいと存じます。

今回の作品集の中で、私はいくつかの作品に格別の興味を抱きました。それらの一部に触れてみたいと思います。神谷徹さんは、国立台北芸術大学との交流展の記録を紹介しています。本学の大学院生と台北芸術大学との企画交流展が京都と台北で開催されました。学生同士の企画で、さまざまの経験を通じて学生たちの成長につながる活動の様子記録されました。関本徹さんの記録は、「脳天気なオブジェ群が日付と関わる事で、新たな記憶が生まれる」としながら、「わしらは好きな事ばかりやってきた」と語る本学の教員たちの満面の笑いを記録に残しました。中山博喜さんの「真珠かがやきプロジェクト」は、「自分たち若い世代がもつと気軽に、自由に楽しめるパール」という

視点で作品群を用意し、多くの人びとから高い評価を受けました。小林秀加さんは「春の息」で、里山に花を生けて、実に見事な新しい風景を生み出しました。奈佐祥正さんは「京の七夕プロジェクト」における五年目の新たな試みとして、京造ねぶた、金魚ねぶた、ほたるねぶたが人びとに感動を与えた様子を記録に残しました。

研究論文では、牛田あや美さんが、昔五〇年にわたって発行された『少年倶楽部』を取り上げました。昭和五年から八年頃における戦意高揚の役目を担った雑誌を敢えて取り上げました。日本は満州国を成立させ、太平洋戦争へと向かう時期でした。八〇万部に迫るほどの発行部数のこの雑誌は、当時の植民地の子どもたちにも熱心に読まれたといえます。野村朋弘さんの「松尾祭再興についての基礎的研究」は、現在毎年四月に催行される松尾祭が、江戸時代末期になって再興されることになった時期の変遷を、さまざまの古文書、神職の日記などを紐解きながら明らかにする研究です。

この紀要の内容は、本学の学術機関リポジトリにも収められます。折にふれて皆さま方にご高覧いただき、参考にしていただくと同時に、ご批判を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

二〇一五年二月一日